

2022 年 2 月 25 日

2021 年度聖路加国際大学大学院看護学研究科
修士論文

高年初産婦を対象とする
出産・育児に向けた心とからだの準備プログラムの開発

Development of Preparation Program toward Childbirth and Childcare for
Primiparas Over 35 Years Old

学生番号 20MW006

氏名 加藤千尋

論文要旨

研究目的

高年初産婦の、分娩期の異常移行リスク低減・育児開始期の疲労回復力向上を目的とした「高年初産婦を対象とする出産・育児に向けた心とからだの準備プログラム」を試行し、プロセス評価からプログラムを洗練させるための示唆を得ることである。

研究方法

研究デザインは、プログラム評価研究である。

プログラムの内容は、コーチング理論を基盤とした全3回のセッションを設定した。1セッション毎に【身体を動かす】【癒し上手になる】【身体を温める】の3領域から、参加者が選択した1領域を取り上げ、その効果と具体的な行動を示した。参加者と共に、それを【実践する】ための行動計画を立案し、自宅での計画遂行を促した。

プログラムのプロセス評価は、量的・質的データを得て、それぞれを分析した上で統合し評価とした。主な量的データは、研究参加者にとってのプログラムの受容性・適切性・実施可能性・持続可能性と、研究参加者の行動遂行状況であった。質的データは、半構造化面接により得た、研究参加者のプログラムにおける主体性・能動性及び意欲の変化、参加者が設定した計画遂行に対する促進要因・阻害要因であった。

本研究は、聖路加国際大学および研究実施機関の研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。(承認番号：聖路加国際大学 21-A021, 研究実施機関 2021-0068)

結果

研究に参加した10名の高年初産婦のうち9名がプログラムを終了した。参加者にとっての実装アウトカムの得点は、負担感と開始時期、実施場所の適切性を除き、平均8点以上であった。参加者が考案した計画を少しでも実施した日の割合の平均は、プログラム期間を通して80%以上を示した一方、計画の8割以上遂行した日の割合の平均は、セッションを重ねる毎に61%→56%→47%と低下していた。質的データの分析から、参加者は、プログラム参加前後において、行動することに対し《腰が重い状態》から《自ら行動する基盤》が引き出された状態へと変化していた。プログラム参加上の「目標の明確化」は参加者に認知されておらず、参加者の行動の障壁への対処には、計画通りできないことを容認する場合と、障壁への対処と計画遵守の両立を目指す場合があった。

結論

プログラムは、実行可能性が高く、参加者は概ね目標を達成することができた。プログラムの課題は、参加者が自らの行動計画を遵守する日の割合を増やすことであり、プログラム参加にあたり、参加者の、妊娠期の目標を共有するよう修正する等検討が必要である。プログラムは、高年初産婦の強みの発揮と《自ら行動する基盤》の醸成を促す側面及びプログラムの目的達成の両面から、参加者にとって均衡のとれた内容とすることが重要である。プログラム開発上の課題は、改定版プログラムを、信頼性の高い指標を用い、産褥期の結果を含めて評価することである。